江戸惣總角物語

一

へ13
3562
1

牛込 池清

京都帝國大學圖書

門 へ 13
0 3562
巻 1

早稲田大學図書館
昭 34.6.3 購入
藏 書

群玉堂乃廊司五織の稗史を搨へ
序詳なるを悔予が云是東都紫
總角物語なるもやはり柳亭種生
拳拳貧陸の事跡さぐりて新
向を巧意猫を刪り陸の實義と
素志が貞操を勧懲乃楽
或ん伽女戯煙乃姦恩をひしぐ黒
なるを婦士乃世人粗しるはなり雪

更に席を乃ち無し否者
あらず廉なる須らく常なるべ
からざるを顧みて一云と述て序辞
換んと欲する稿を清書して遂
維時天保壬寅初夏

島御野吏

牛込 池清

萬屋助六
三浦屋総角 江戸紫三人同胞 初編

種彦著

異本は安房郡とあり

一 地蔵之宮剣

名ある服は狂雲のうちにひろと失ひ色ある花々山風に香を空しうす。義玉くだけ中くに。甘泉竭きし。人も又ちり戈あるは愚なるみへぐとられ。義人は魂婦ぐ邪ぐうり冠ふ。ちりぶと。むくうり今ふつてかぐみべうそ。遠き昔のうそよ安房國朝夷郡白浜城主里見太郎義実ぐうちふ。氷上曽根太郎氷上瀬次郎万谷助六と

子三人の兄弟あり。父母は三四年いぜん死せり。助六は
はつぐ子角ぐら他家とつづて万谷と名のり。同国滝の
瀬といふところに住居して。賦ぶ〜からいとゆうあぞ
くらし〜なり。仰此氷上の家は。伊賀守義成ようつよ義実
ふつくりて。里見家みつゆるさ八代ふかうびしくふ。義実公
の御かぶえも他ふ異ゐして。里見家の祖なる多田満仲公よ
り。伊豫守頼義へつくしし。蛇形丸の宮剣二振とそなへ。
そのほかあまたの宝器と曽根太郎兄弟ふあづけまひ
しぶ。宝蔵ふうくひめおくこと毎年六月十五日ふとり

ぶ〜虫とそうひ風とつとてかくれぬ今日虫ぶ〜の當日と
しぶ。曽根太郎は白浜の城中へ勤仕して家ふあるを御ぶ
助六は譜代の家来羽川事平とつる者のうちも宝
剣をとりつぶ〜厳ふまもり居るもうつ。伊吹庄司久
國とつる仲文の評なり。関屋とつる侍女を使として。
兄弟の者と俄ふまわるれば。兄弟いとぶうり縁故と
関屋ふ同家やつふは行ふまと君ならとやらふむ
来よと宣ひて。ふし〜にたまりゆるぞとつくへれば。
ぶも少時半平ふ宝剣の守護とゆぶね生ぶね元来関やと

いつる侍女ハ綾瀬とよぶ妹ありて。いと実なる此氷上の館に
つかへれバ。曽根太郎その性のさかしきをみてとりて。伊吹久
国が許へおくりて。妹綾瀬ハ今なほ此館に勤居けれバ姉の糸
くしどのとて此所へ立出て互に便なるを喜びけり。嗚呼斯
る珍事の出来つる時節にやありけん近曽より聞やる伝
平が風流士なるを慕ひて伝平も又聞やが美人に懸想
し。いつねおもひの底の思ひもいつのほどにかとけそめてける
なれ中となりてけれバ妹おやすが席を退れしをりをりの伝
平が側に来り。鬼とみゆる男。つよきなれもおもやかなりけん。

さんひおもりにも人なれに言葉さんらしなかねハ妻に言で
かんさんなりぬわけにもうだしなる者ありや少よやしと夫
とりて袂を突払へ袖をふりて背を伝平が方にさしむけ
躬らぐ来りけれバ伝平うろたへひわかにそそるこの此方より
いひ出べき言葉ん君命重しとまて腰に宝剣を守り居る
伝平に。けがれなる女の身とかそうぶりに近づくべき。是れ
おもふこともれバしとわざなくいらへけれバ聞や恨ありげな
うらみやり。無情ことのなふかのや。何事のさなりのあ
まと。あのびおふ彼のとぶへしん妻に秋の風ぐちて疎まるふ

おがへ侍る。今日使を幸に〜。妹が物語ありといひて〜らへ。
黄昏ごろ主君がいまをれば。言も〜ゆも〜
ろもちんと。滝つらひとつくる〜へ。筆ゑりまで衣が墨つ
き。乗る弱のつまびくみそもつくがゑのいち〜せまんとあり
ける平が勝ふりそんど。当平が西宮が気とらづて
いつへぶやざれば。関やさんもれのあまり沖ゑ。とらぶひ。
当平ゑ大小をとり。神ふてて御道のうんうけゆく。
事平うちかどうた。こん戦ともが品がそれと追うけ
ふ関やいたるが逃のび。りんがいひるといんねが

関ヒ多情西乃介餅トミテ手まり七人ヲ誑ケリ

れば。両腰いりんがあづうまるる。若両腰とはんとあり
ば。爰まで来りのへとさ〜招くが当平あれ気といらう追
ひば。関やいとび石をつるひ程なるれうる茶房のうちへ
ふけるる。当平もぐいて入るる。霹靂一声頭上が
震ふとひと〜く。夕立あれ盆を傾るがごとくあれば。二人
へ詮あれうむれうう頓ふ戻もゆるぞ。少時外面とあるあ
居うう。恠むば〜此時ぐれうう唐躍麦と踏うて。
ま〜〜降あれの音ふゆるれ。黒い頭巾ふ面をつくし
忍姿の大男。ぐらふ床ふとびあがって。餘の物共眼もういぞ

きらきらあ

宝剣を盗み出し、当平が茶屋にありて、ときどき待
ども雨ふりとなりしかれば、路次笠をとりてありときのぎ。
足をつゝぶりて、飛石をとうく。えの坐にふんらんとなん
う。忍者とおぼしく、覆面したる大男。こなたの垣をのり
こんとは。こは曲者と胸ぐらをとりて引
ふり。忍者はきらひのけく行んとせし又立つぐらう押止
れど。庭にふみをぐりとうつがきにふりひぐ。二人の
全身泥塗となり。或は髻をつかむ。或は路次笠をうもし
ていどみあひ。丁々とおり合せ刀の光は閃電ふまぶひ。おもい

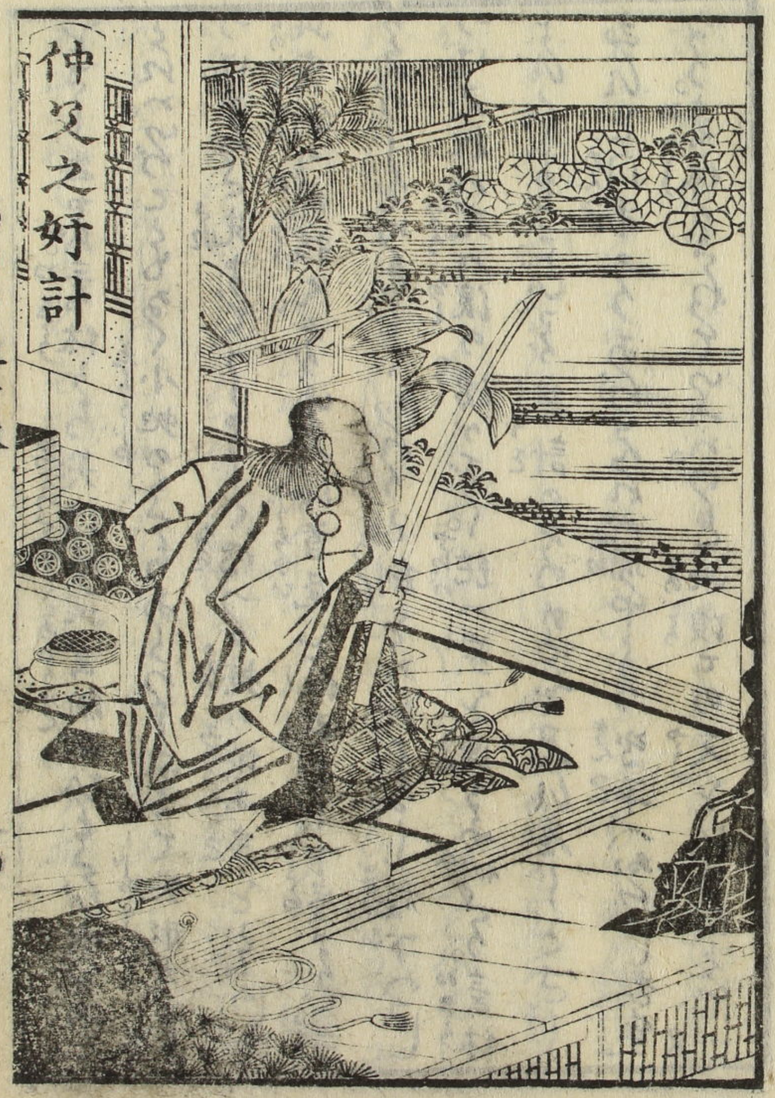
横ふ降風は四方にうなり吹泥水眼口へいりて咫尺も弁ずう
うちふ切ひそふ器やはるうり胸ぐれ。こいふ[illegible]と泣き懇
ふ。只二人がやうりをいぐりふ回るのみ。当平いらつてあり迫
刀忍者の冒公とうそう。君者がうひまぐれ刀あぐとでる平も
肩尖へ浅てをうけ後ふ撞と倒るく間ふ曲りのハ假山とあり
ふあげゆくと起あぐて追ゆけど当平が運のきんやあり
り。土橋とうくわき泉水へきうひあつる曲者ひるうと刀と
うあげ切んとせーぐ。見越の松の下枝ふきうあくて動ぐ。
れ幸とやうひり彼松ふうどのぐう。ゆくあもきうく逃失

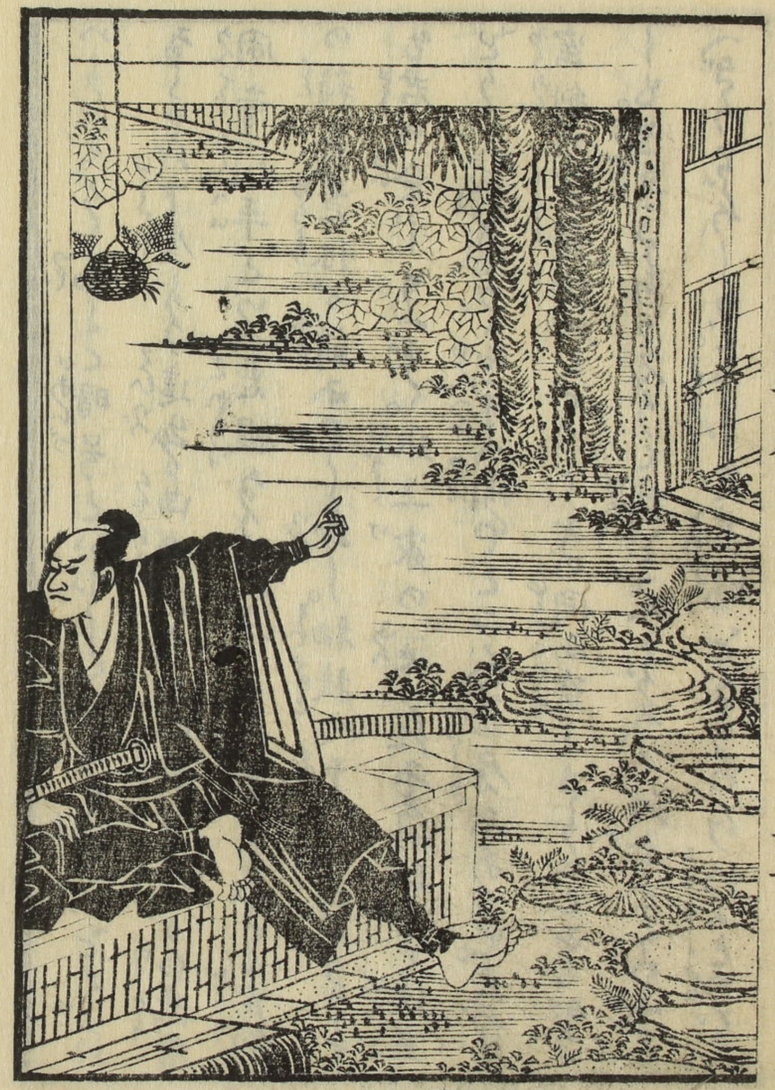
さう是いさそなん物語別ふあり氷上兄弟の仲又伊次庄司
久國といふのふ。弟根太郎ホグ又氷上東弥太といつらう腹
からうの弟ふて既ふ氷上の家とつぐろうしを。東弥太老
後ふかうんて三人の男子とりふけーぶ。初老ふのぞんで
斬髪とあり母さの性と名るつ。伊吹の伊ふ久國の久と合
文字とりて意休と別名ー別舘ふ住居りるかくて瀬次
郎助六兄弟ハいそれ別舘ふ来りれハ意休ろくろとし
酒者とりふけてりてるーつ。ついれふーくふひのさあれい
兄弟と振ーくらろ一盃と酌べーといふ瀬次

助六声とひとくるーゆりろ。仲又君ふもうそちも
るふぐく。今日六月るぐるれば主君ろうあづうこそあるる
地取丸の宝剣をぐわ。そのあり種ての宝器ふ風をいく
當日るれば。ちぐーのいそまるれど。仲又君の俄ふすわざ
のふふろう。君いろるる剣ぐすあやとろひちぐーあて系
伊ふ。寿ふぐくるんふ。明日をあうくゆりふ答意
とろくべーといひれば。意休席とりどろ。いるも今日
虫ぐーのあるそをいれそとろう。そもあろぐあれ家
ふ羽川雪平あれば。気づふーれそもあるちぐ。先一そいを

うこつけそのうつりわと。ひさのをうれべ日頃うり仲
父とうやゝふを。親ふ住ふうるぶでれ兄者の性をえ
るくもやうび酒席ふつうるる。此ゝり夕立雨ふとゝこ
うゝいで。漸暮ふあうび小止をうゝてぞ別をう。高ふ
もゝうゝうあうう出四方を眺望るゝふ。夏月東天ふ
のぶう。銀河斜ふして高風吹けうう。邑をめづる水の音
むびをく。つゝをれてゝ秋うとゝふと独ぐちるゝ。今迄うゝ
ゞやゝゝく鳴るる蛙鐵ふ声をとゞめうゝと少。莞爾とうう
笑あうゝゝやさてハ我大望をゝのひゝとかぼゝう。時ゝ

へうゝたぞうく出ゝと。暗号とおぶゝく指ふて様板をちゞれ
るうゝやゞ下屋うう這出る曲者あう。これ則高休ゝ白蓋者
雨寺門平とゝ悪根ふう。門平ゝをむさみる宝剣
の箱を意休ゞ前ふうゝ出ゝ。袖扶のをとをうゝさて
も君の命ゝ出ふぐく。氷上家の庭さんふまのび居て便宜
とうゞゝゞ。ゝうゝく門平ハ関やと二人茶房ふあうて。まゞゝ
宝剣の守護とおうゝうゝその間ふ盗ゝさうんとをるおう
しも。門平ゝうゝうゝて我とゝんとゞゞ。やん屋とうのふさ
へゞうゝゞゝうゝど。辛ゝゞて其場をうゝわけ仕ふと刀ゞと


仲父之好計



とさ〜出やば。言休うち笑ひ少此宝剣みひとつび水と洒ぐ
れへ。づこもなく小蛇のうちあつつふふて蛇形丸と名
づけ。まつ先まどうまくぬる蛙の俄ふ声ととめも。
此宝剣の威徳。そゞゆえ汝首尾と仕そや。下屋やうぐ立
ちとをいとく知わうと。剣をねれてるゝ燈下へさし
つければ。光へ浪の湧がぞ。紙へ星を連るふ似うう。言休
まくうちうびぶ謀計のものを見屋〜とさ〜
出へと。門平うあげうれば関やうう雪平へおうし数年
ぶう。言休うわてへ。いつと此須ちの文とひうひとて一

計をもりひあうう。今日出ぶ〜をいつぐるおりちまて兄弟と
ぶ家ふやわれそ使とやれ屋ふひひつ。妹あや洲もり〜こ
まあれば。日暮るやどへうう〜じ。孫やふのぐうあもと
ゆをやるやもしぶ。果〜て魚へ餌の香〜れとうとびて。汁
あるとをちぞさ〜も智ある雪平をうぶや屋ぶ邑ふみ
やうひ宝剣のち護かううう〜ふん。秘をべ〜く説給ふ
ぶう。門あうぐ〜くうちうし仲兄君ふやべれをあうと洲
ぶぶぶ声ず〜うれば門平へうの下屋ふ忍び。宝剣と琴
画ふれてりかくを移うく洲ひぶつとうう寿う。仲兄ぶと

大変あらと吐息して。あらいひも出ず十方ふられて口ごうれば。
言休うちかどうれしさうをす。そいつある変変あらうぞ
うれし。うく少ん と勝をきく。激ひく脇をうて。己れ才助六
うろうも家ふうろうしぐ。たや暮をぐれど燈もうぐ。ぐ
女のさあぐぐと泣声のく少うぐぶいうれと裡ふいるふも
平のうもぐうしわぐと。切腹をうんぞあうちうるを関や
あや潔左右ううふもぐうとひうるぶうるうを狂乱
うるうと中かとうぐさうるうる曲縁を向へど頭をうれう一
言半句の答もううぐど関やをやうを首尾を少ぐふ

ぐうひうぐや。ぐ平うわて鼻やと私情を通じあうしとやうん。
その間ふ行りのうも知うぐ虻形丸の宮剣と盗ぐさう剣曲
者の貞さんえううあざれば。ふ明分説ぐうと又刀ふうを
うけて自害ぐんぐ形勢ぐれば。助六のううもうぐ止え根
根しやぐ平ぐのれ一人腹切とて。氷上の家の冒度とぐうう
ざうくふもあうぐぞひとまぐう白地ふ主君へ謬をやうぐ宮の
貪義ぐうんを忠うも義うもうぐうさと。理をうくをどうも
あれうぐうううぐれ光景うれば。助六と泣ぐうれ此変変と
告げうくとううさんれあうくうひうれば。言休い少ぐふ肝ぐれ

一ぬりたて差添をわたしまゐる。南無と一声いれ掖へ突
さしんとそ。濁ひらぶ周章てぶきとわ。こゝ仲又君何ものゝ
四生害ぞ。まづこのうを語り人とまるとざんべ言沐わと
ゝ息をつく。何ぞこゝ汚ろある同ぞや。今日宮物の虫
がをうちちれ兄弟とやわれ。ある改支を引ちへこれ
一生のあやまちあて。我ゐとかゝて盗も同じ。助六其方
いともわれ方根ちらへ行とゝ説ゐをぞんぞ。とくとろうじ
とつぶそべ。濁ひらいとぶらしくつゝこゝ仲又君ゐも物ゐて
しねひゐふ先ゐ雪平ゐもつぶく。ひとやぶ義実公へこの

うつやをやあげ。活るも死るも主命ゐやうをと士ある者
の本言へ切抜ゐてとをちべりとをこれゐ生害ちんと発
を叩て辱しむとべ言休もむべくとやゐひりん差添室ゐお
さむるとゐて。濁ひらをとーゐとやちんど。言休ゐ従者とゐ
ぶーぶーゐ自害あるん形勢ゐ。止めやうやうやと私ゐひつけ。
いくちとさして立ちをを言休わくをを後ろげををゐ。明日
い必定ちぶう首を斬らるべー。その宮剣いををゐあう。知らざる
をを仏菩薩をと一人ぶち。門平ゐあつく黄金をあるへる扱
も濁ひらへ家ゐうう。白須ゐ人ををて方根ちらをゆむへ

兄弟三人額とあつまりて高義をしるべ。おのおのらふるびなくも
なく一伍一付と主君へ告げまつる。ふかく罪をきひれば義実ゆ
たうえん三種の神宝さん一度西海の浪に沒しぬ。先祖うつ
さうし宮剣と失ふ。その咎うかがねど。今彼らを責ひとも。
宮剣の行方きうくふもあらば。一度彼らが罪をゆるし。宮の
金義をひつくべし。たぶる程たらばへ城中にあつて。家の業の
ときざれば。いさうも罪なしと両人の所領ともに程たらふ
あづけおひぬ。源ひら助六はさうえん平国やも彼らうるうち
ま。かくてあつん君の御恵骨に肝に彼ぢ忘れ侍らじ。

十七

剣のむくろふ所。火悩の塵ふのうつてうつと拐生さてかく
へんと四人ひらく来びうる。明日はうう義実公うう初鹿速水
之助とつ士をして。源ひら助六を西ざうひうう追たらふべうう
命じおひ。たと宮剣を拐生ふおのとい本願安堵さうるべく
御墨付をうぐしおひ。かくてふうるし。いづちをあて
と定やもなく安平国やおうふ出ぬ。彼程たう高休も西
ざひやで送りきて。若假柄もさざきべ。書簡をうくつづ
きひぐと。源うぐうふ別れうる。

二

そざのかくをぐ

下総國角田うらふ國屋のさくつ所あり。吉平と別るゝ
しをんやも彼妻のむすめれるれば然らむ又妹もワラ迎え
川ふかりて綾せとまうけりる元来ちのあねりくいて貧
しい農夫のみ。みて。又いつけるとさ分ゆうう朽柔と母
老る母のくみて暮や十五六戈のうちでハ家ふありしが母
朽柔もむしハさる中どもれ師鎌ふ給仕して假名文の一くうも
えなびえる老女ゐれば表ゆ機ゆいゆゆしてうさふ月日を
おくらんハ若れなびふハ本言ゆうびと往年つをりとゆ氷上の
家の侍女ふかりるゆれ屋も年老る母とうちをと他國縁

らんハ。のをとふうとむざれど。そふをを離さる母の性ふちうら
ゆく妹あや激ゆうとも。安房國へ行ゆ。第気の花のあどし
でうう。主君さる激ゆ助六さん浪くの分とゆうゆ。朽だゆ
歎きつゝべくもゆく。されバうくいよ関やをうしゆうとも
かうゆうゆゆあゆ。まらゆれば。吉平をゆうく婚とゆ。あうの
空舎を買うとゆ。塵をうつと激ゆ助六ゆ仮柵とゆ。
四人ひうく窟剣の沒義ふ山をぶゆ。ゆ山れかゆ書
簡をうく安房國へも告ゆ。芳信ちうもうゆ山をゆ。
一年いとゆとゆもゆくをゆれとゆ。説話休否。さゆも前つ年言休

久
門平が宝剣をうづせ兄弟三人を罪ふかう。のち氷上の
家をつぐ。ぐくのしゅ。美実ぐに。あく。あと類縁其後い
行ものひりん。男鹿岡人とあやまれくさぐ。のとあしふの頃彊
らふが早舟とうぶ。桑女あうて。さん頃琉球うう。蛇皮二弦の琴
器ぐうしを。和泉岡中小路と。琵琶法師一弦をきんと。三弦
を製しうと。の早あもうくその。ぬるをうあ。万葉の長
ふが郎をうぶ。てうひれば。月ふる。鼠花ふる。延ふ。ふみ人
うしてうとを。ふ人りる。考休わの。ふ早あがてを。少忠し教
百金が賜ひん。男猛たふが。和主ふぐ書うしそ。ねぐ

わ
びしくふらめられ色をもさがるふもあるび子うん
の一うう。ふ山へいるかぐうれど苦しうびへ側女ともうるしうんと。
早舟をおうりる。あうれも彊食ふあうつうるんへ初とやとん家
をふうび。男を買ふ人のうふが被ひしとやうの家ふあぐ。
られて武士うる者の側女とうう。うびふうんびをうひて
合仕しられば。男猛たふも二うん者ふかりひ翼をうくく枝を連る
うちぐうふくううふりう。さて考休いうるる波討ありて。
つ舟を男猛たふかうしと問ふ彼へかくふ人ふうれうる
給女うれば媚をうんぐ花情をうも。好語をひてうる猛たふぐ心

なとゝかふさん。されバ白濱の勤仕もかとゝろへ必定せり。その虚に
乗じ旁信ちふもちれのゝふかさんとかくもかのひめぐらしけるが。
さんかくていよく氷上の家の栄を心のうちにハ怨といへど。
旁て邑にあらんさんば。ちづく旁信ちらが許を訪ひ。かのやから旁が
数ふ告さしれのちからび実をつくし仕ふるをえかるわびものしバ。
いとこゝろ旁系を側女とちさんものをと悔の中ちらぐびらめれど
もいまさら彼をのがれべーといひもちらび。かのひにむねを痛め
けるがかくてあるられ門平を使として下総国葛やの里にいてらせ。
瀬ひらを俄に招れけれバ。瀬ひらハ何ちりせんと心をいそがし助

六ふ笛号をあづけ義実公の勘気の身をゆるされ。よろこびのあまりに並
ふくられ。日あらびして言体が家にいたりける。言体微ららが素
りしを大ふよろこび。ひそかなる所にとゞめかひさそやりるいりと和主
を招れしを別義にあらぎ和主助六此国をさりてのち。いかなる夫
ものみのとりん旁信ならが行状ちらしからび。昼夜婬酒にふける
て白濱の勤仕をかとゝろびまちろさん此ごろ妾系とふ蘇女を側
女とかせしが。彼又ちびひまれなる婬婦にて目にふるゝその男に懸
想し私夫をひれいてことあられあしれをあるとびされど旁
信ちらへて妾系を寵し好ろ且てこれをきらびなく諫

をいる者あれども馬耳風のうとんのごく。妻益ごとくうゐれく。
いまらたやワづいてさんのらひざれば作ごべうう和主をうねに
さうと。実ーくひりれば。流ひうもあるうふそうひりつけざるとる
れば頼ふいうんもうさんび。やあうて仲文君ふーそう此憂をさ
くべーとひりれば。言体声をひろくなーりとありふをあり。和主
今肩りとうのふ弟根ろうぶ洗ふいうう。酒ふ酔ひまれうあ
りさまふて。ふ為ふ教書とあるべー。さんふいふごくある嬉婦
あれば。遠ふ。とうさんハ読ふいろのうるうごく。百ふ一もあや
まちまごうのち彼が恐るふを白地ふ弟根をふふんもうる嬉

婦あれば。ふ為をまうごけめんどうとうも諫言ふさんーー
ろうとあうして弟根ろうふ告ふうも。諫言ふさん方役ふく。
まうさうひーをとうと分ひいひとうべ。和主のいひうりいあきう
うん永上家の浮沈ふあうと。理あうげふいひれば。流ひうよハ
ふをとふふもあうねど。只一をうぶふ篤実のうある性あれいふう
随意むべううとあうひ。言うさうが側ふて教書のあうひれとうひ
ふるふまうもうさぐ、。うれるうう。坂もあるごれんをうふ
いうまるも。縁ふうとあううや。うひちづけく忍ぶんふ春の情を
かけくうういうを。弟のをうふれうう。言うさうとあうつと

男很ちゝが家ふいろう。おやうふをとづとを少ばらへれば。ひとゝう
ふ訪ひまらちゝといひ。そぐこゝろあるをとゝしを男很ちゝも銭
まゝうゝとびゝうづ助六ゞゝをるをを問ひ。ちゝいハ旅のつゝれもあゝん
に。明日ことつゝる物借ちゝん。と余のまいつひ出ば。汚者をゆふ
けのそゝしる。絶ひゝハ五ちふ言ゝゝうゞつひゝるとゝふゝゝう
ゝく酒も咽ふぐゝゝび。目をとゞめ空腹の光景をゝくゝるふ。
ちゝゝと在四の刺ハゝゝもあれね男雛女ふ男很ちゝふゞ側ふう
きゝひ居れば。ことちを彼媒婦ちゝんと女ふ指し。遠ひふ骨れ
しゝゝん。ちゝあゝとその坐と退生ゝひ関やゝ妹あゝ瀧ハ男很

ちゝふゝゝん。ゝもちゝ四此鏑ふあれハ。瀧ひふ彼をゝびゝゝ。姉ちゝ
五毋ちゝの墓ちゝゝをつりをとゝるゝふあゞをとゝゝふ
向ひゝれあゝセ言て宮ふゝゝく足君ちゝゝといふ女を側女ゝゝふ
ゝゝひゝゝゞ。彼人ふゞゝゝ媒れゝるゝあゝとゞゝも少ゝゝゝゝ。
殊さゝ憐ゝゝゝれ性ゝて。ゝゝゝ喜ふさんゝをつけくゝゝゝゝゝゝ。
媒ゝゝふ別れゝゝゝゝもちゝふゝとゝを姉ゝも主ゝもゝゝれひて。
ゝゝゝゝさふゝゝ行ゝとゝひゝるふ瀧ひふをゝゝくゝゝゝひゝゝ。
鬼やゝん角やゝんとゝんゝゝゝゝゞゞ言休ゞ言ゝ言ふゝゝ空。
此知恵夫をゝゝてゝゝ。彼ゞゝをひれゝんと声を嬉め白地

ふひらさんいうとあれば。兄君の目ふかとざらゆう。此文をあ
とやん女ふかろうらんることいひりれば。綾瀬へふかうらうひらう。
廊とうひてあうのうさふいうらんとなをを言ちうへうん
ところふてうひとぞう。今乗帝門のあうさふ少ゆるふ。さへ瀬ふ
ううあうひうりうへおうる鶏丸。若おうひうひうぞーて。
それ者仕をふかうるべ。やーれ方夏をひれ出んべーそん我
ふあうんぷうるくかさんる計あうと弼をつくしていひりれば。
綾瀬へいとさうん性うれど。此年十四才ふて瀬童ごちゃし
うる未通女あれば。こへ何とうさんとうるうふひう。言をうう

假令之の孫
人ノ業より共
外ニ仕方もん
べきニ嫁ニ艶
書ヲ送ルトハ言
語ニ絶ル事ニ
持うゆうんをト
何ブ怪ンバン
雷下ノ冠ル
四ノ出ノ戒ル
ハスヤ

ていをを宮ふもとやりひりん。りの丈ををのまく言何ふうし
りる。少時あうて言ちうあうるふいうう。密ふいひうるる。
ゆんを自いやうさ洋のていまるやじるれど。今る来うる瀬ひうさいふ
者へ兄君根ちうゆへ似もううび。嬉酒ふふうし悪性者みて
されば主人の勘気をうふひう。へ行岡ふをうう。彼先ふ
酒席ふあうしへ自ふうくく鶏毒セーあのううるぶ。ちさーと
ちうんのへ強ふまううふ小ふのねーへとまるセーへうるとう蕊
へ瀬ふ彼ふと。へ自ふどうく鶏毒丈とおうーへひとりのうげふうう
ひへ居るとうまうび。此丈とあや瀬ふへひうつ。へ自の洗へおうんと

なしくるるをこいて五又あや瀧をそしろう。人ちらを煙とるさんと
おのぼひしぶつくぐおのひもぐ〳〵をふ然とろらぐ身まのふをを
うけかさあのふとおのひ。又つて夏をひに出さん少時怒り孤
見びるひ。ぼ身ぶづ〳〵此文を彼ふ久し。めのづ〳〵そぐらふぐ
く言ゆさぶうともろひの金をさんとおひとをとつひゃれば。
あ面白ふあをまあをらし。ゆ時あれれを言ふさん出さうう
しぶ流石さるれる女るれば。さるもあうんと男ひゃん。乃
文を扶ふいれ。瀧ひるがある一室の方へあゆをゆく。言さう
も後ふつれをひて。つるるをゆ言ふわうんと。間を角ぐと耳

をるふけ少ゆるる。あうるまづるふ瀧るが側ふ赤う。数のらね
妻ふあつれひの仰ぐありしん。身ふもあゆそうもしを仰れど。
ぐつゆあるれつをしるねう。るるの杖の数をまし。つくまの
鴻をるわんと。女るる者のつゆゆる要ぐ〳〵ゆさんるられど
を実とヒしとさぐゆ若ひゆるんが口さぐるれも女子のはゆ
と少ゆるしゆ人。るの玉章若兄君の目ふるう。ざれぐう実と
あう。連枝のるるさとて。わとを衣をるのぐ。妻もるさじ数ある
ふ仰るう。ちゆく火ふいとゆれをそのんと。言ふ素ぐ〳〵ひるし
退れ出ね瀧ひる彼玉章をるうあげ。此姫婦我ふるるるる

あさましハ。されど彼が運のつきたると。此がりきそんと封じきれバご
いつハ。ならへ女文字の返りあり。愕然としてうちまもれバ。わし
かつゆめともやせんと。言葉みんなごとをげなりめてなし
まのうせしが。衆中ぎきある所にわかれバ。今宵四更の締をお
男にあのべせの人。男根なるの愚者に。おくまで酒をのりつ
けわれバ。砕きともてるおひなし。それくの事なれ坐敷にね
やをのふけしやうちまのら見んと。のかそへかどろいたいかうち
しては怒りなそうしるのつよさり。いうに瀬をにつかはし
かならずや嫉婦ならんと声うけておもふと来るに。その則

言はきこりん瀬をにありし恥事をおぼえり此返事の文くハふりけれ
実彼ふ約をうけしと思ひ男根なるの愚者とまろしおり我
ふさんらくのぎし。いわんや他人と通ぜしおのへ強兄君をけらひ
種ふなしりんもの面ふくさま此恨のふしそろなるりんと出気
あのひがられおのちすれバ言はきり膝をまちわそれいと然毎を
し汝とうひ彼が閨へしのびおと一刀ふさしころせよぶとんなる
糸死しなりとも此返事を說授となしそけるとももくるひ
說べ男根なるの迷ひなるりんハ必定なり。此計のなるりんと言
けれバ瀬をに此義もべんとおのひまづ四更ゆんかどもおらんに

仲丈君ゆもまづ一ゆきの人と西人いかのとくが門戸ゆうを
のちん音もなくひそりうこと言さうゆうる奸計あ
ま。さん次のぐうを傷ひとちん

三　因果之暗討

瀧ひろハ夜の更行をまち先彼婦を殺害ろし。そのくら
言さうのうとも若根ちうゆ諫言なさびやとひとをぐゆえ
ひとう。菊の花ぐんのうげゆうくろひ虎づくひゆまのびゆけで
まや表半ゆしいるうさの月ハゆぶれる境のぐく彩ちう
しを紳うれる焼史ゆ仍くうぐ。ゆうーも尽さゆゆくきりくと

柴折戸のめぐるかとうんうゆ人や来ると。流石ゆうしろわこ
く御行極ゆさひのぐれぐ。人やうわどて陸子紙門むゆふつ
わそひくれ。ぐんまく国ゆまのびつとぐちうふさとして短歌
つゆ紳うちかひ。暗ゆあやふく強をうで格どさぐうゆをれ
屏風をひれあけ。ふうそでのちーをゆぐうてうぐうう己
婦婦うくもいぐ兄のゆをとうをーよ。先ゆ数年をうを
さるも。汝ぐゆをひれゆんさゆぞと氷ゆんゆを逆ゆゆわさ
うちぐひをさーうをどぐあつと一声竜ぐうとゆ人ゆく息ハ
うんをそうう。ちをしうと死骸の裳ゆ力をわぐひ。外の方

曽根太郎何故
女子ノ衣ヲ被テ
藤夕ん屋前ニ立
ツヤシ但シ若作
者ノ脱落ナル
ヤ

瀬川郎其媛ノ
淫婦夕んヲ信セバ
之ニ告ゲテ之ヲ
去ラシメ之ヲ
誅シ家ヲ起シ
始メテ媛ヲ殺シ
テ可ナリ然ンニ

了迷惑好
況メテ深閨
ナミ立チテ
言セントシテ
昔用ヒシ
刺入仰ムニ
サ人無丈セ
ツ以テ意休
ノ拙策モ
図ニ当シル処

へ出んとせ。此とれ言ふ事ハ被をのとゑまゝくの尖うげをう
くゝ。瀬ふがふが側らくあめこぐろ。ふ曲者と雪洞をさゝう
ゑか尖うけふこれべ。ゑあとおりひのうろ。兄弟根ちふ女のふ代
を刃ふきふ八。鮮血ふゆきれと死おろう。言ふう声落らげ
盗ぐゝの為業とありひのうく。汝ハ瀬ふふふおうびゃ。そもいう
ゑる根あうく。ゑ京根ちふを殺害セ。あれとうへふ
声ふつと門平もゝめおゝふの侍。瀬ふうをふゝあゝといし
うゝる。瀬ふふハ義ともゝ既ふもふるゝ。ゆ時あれおゝ居ゝ
うしゝのうひゝん逃ゝる侍を三四人ふとを投のけ辛しゝく

外のうへ走り出。ふ所もまれぞ逃失りう。言ふう覚ふし
て。かと何地へ逃去ともいと仔細あれば遠く追てふ止
るべしと。それくふ又賞金をおゝ。門戸ふいゝとゆゝう。
ふといゝるとふて弟根ちふ女ふ国ふありしとふふゝ
ゝ言ふう瀬ふふを購とゆゝ女ふ跡ふ無表丈をゝセ。
瀬ふふふ女ふ跡をふふ。ぶえべくもゝれば言ふうかゆ
て女ふとめて逃ゝをとうふ人あれ。あゆ瀬ふをふして数也
をとゝくゝるとれうふ人あれしゝ逃ゝをいとゝへふ女ふふ
ゝう。ゝゆ女ふ実ふ瀬ふふゝ無表丈とりひ。ゝふふハ逃ゝ

の侍のあるをもとらんとて。先のごく瀬ふえしぬ。その内瀬
ふふふを殺害あるべしとあり。彼瀬ふふふ数年をむ
ひそふ者ばかりふえ。彼が怒りをひれ出しごとく思べく
文をいあれば。人ごとおふが周防へいりかうねて瀬ふふが
見び来るを捕へ異えあるが彼もものごとく恥てあ為ふ支ム
ひらべしといひしを。者ばかりもつあふ言ふうう好計ふ
ちあり。瀬ふふが一力ふ命をかうね。嗚呼これいうなる
日ぞ。于時文安三年丙寅炑九月某日あうりうさんも
瀬ふふはうつぞ兄者ばかりと宝セしまるく仲又三休

が好計あらんとむづれ。若門平あふとうくられるべ忽地三休
が侍無ふて罪ふうし。彼首をあらわんさまれば此一支助
六雪乎ふもつぐるとあるぞ。恨をあるうんとれうるべし。
と瀬ふの墳を切めり。夜ふ日ふ伊べ下紅図へうりうり助
六雪乎へ。瀬ふふが房州へ旅立しをいうる支ふうんとム
ひいづらふとん。瀬ふふが四ふ支ふうしをあふううこび。いまぞ出逐
へ中義ふうのうひ伊ふのまふて仲又若うう俄ふ扶れるひ
しなど問ひられど。頭をうれて一切をべも出さべ。ゆあるてひ
るう。仲又君兄人ふもつまぐうふきしまやべ。れ者ふ古へ

古寺之無常

あるれいとい益ねどうろちゝらあゝと一室ふりてお助ぬ助六
湖ひとゝぶ。りのありいゝ顔色をゑふぶう。雪平ぐ紙をひいて
いひるゝ見人のあうさま平生ふかろう。その上刀のさげ緒ふ
鮮血のつれるゝ房刈ゆてひとゝるゝねち変あうしい必定
やうさんどワとくふくつゝゝふもゝとゝ又ゝれ掾故あゝん。
関やいちゝん。朽ふい老女のゝるれば目見安るべし。彼ゆも仔
細を請ゝ申け。そもゝ公をつゝをべゝとあゝへゝる。湖ひとゝい
閨房ふいう一伍一付を書あれて。切腹ゝさんど見悟あれど
ちや助六雪平ちのあうちふゝぶゝ。紙門ふうゝてゝゝぶ居る

あうさまゝあれば若ゝんぶあゝかんと筆紙を潜ふう
出音ゝれやふふ雨戸をひゝれ。此変ゝう三四あゝう南ゝ
ゝふ林鐘寺といふ古寺あうゝぶ。かの寺へちめびゝれ仏
前の燈らうをゝふう。公ちづゝふ書ゝれを書ゝう。切腹
ゝうゝと死先ゝう。鳴海山ゝ。人の言ゝる実あう。侍人の言ゝ事
さと蜜のゝゝ。人を害と利剣ふもゝゝゝわうゝと言ゝさうが
ゝゝれ侍人をさゝゝやいひゝん。書をひゝくの女児ゝを見紙
ふゝゝゝ。要をゝゝを一助ともちゝひね。